

# ハクテイイビズム とは何か

ハッカーと社会運動



塚越健司

ハクテイビズムとは何か  
ツーカーと社会運動



塚越健司

ソフトバンク新書 204

著者略歴

## 塚越健司 (つかごし・けんじ)

1984 年生まれ。一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程在籍中。専攻は情報社会学、社会哲学。

研究対象は、思想家ミシェル・フーコーからウィキリークスやハクティビズムなどネット社会の諸現象まで幅広い。

共著に『日本人が知らないウィキリークス』(洋泉社)、共編著に『「統治」を創造する』(春秋社)がある。

その他にも雑誌やラジオなどでも積極的に自身の研究に基づき発言を続けている。

ソフトバンク新書 204

## ハクティビズムとは<sup>なに</sup>何か ハッカーと<sup>しゃかいうんどう</sup>社会運動

2012年 8 月25日 初版第1刷発行

著 者：<sup>つかごしけんじ</sup>塚越健司

発行者：新田光敏

発行所：ソフトバンク クリエイティブ株式会社

〒106-0032 東京都港区六本木 2-4-5

電話：03-5549-1201 (営業部)

装 丁：ブックウォール

組 版：アーティザンカンパニー株式会社

印刷・製本：図書印刷株式会社

落丁本、乱丁本は小社営業部にてお取り替えいたします。定価はカバーに記載されております。  
本書の内容に関するご質問等は、小社学芸書籍編集部まで書面にてご連絡いただきますようお願いいたします。

© Kenji Tsukagoshi 2012 Printed in Japan

ISBN 978-4-7973-6962-5

## 目次

## 序章

3

ハッカー集団が日本を攻撃？／ハッカーと創造性／ハッカーと政治／注目を集めるハクティビズム／アノニマスと直接的ハック／市民的不服従／本書の構成／本書を読むにあたって

## 第一章 コンピュータとハッカーの登場

23

ハッカーとは何者か？／ハッカーの誕生―MITテック鉄道模型クラブ／ハックについて／ハッカー倫理の形成／コンピュータへの情熱／アーパネット／アメリカ西海岸の個性／カウンターカルチャーとその影響／フロンティアスピリット／七〇年代ハッ

カーとパソコンの誕生

## 第二章 ハッカーと権力の衝突

57

情報の秘匿と暗号化／国家安全保障局／公開鍵暗号方式の登場／暗号ビジネスとロース・ノーツ／暗号技術をネットに放流——PGP暗号／フリーソフトウェア財団／電子フロンティア財団／サイファーク／ハクティビズムの誕生／サイバースペース独立宣言——自律と自由／コップの中の嵐か？——カリフォルニア・イデオロギ—／コップの中の嵐を越えて——ハックの進化

## 第三章 創造性とウィキリークス

97

インターネットとパソコンの普及／サイバー犯罪者、現る／サイバースペースの自治から現実の社会改革へ／ハクティビズムの定義／政策無効化とは何か／DeCSSが与えた衝撃／ソニー・ベータマックス事件／ウィニーと政策無効化／ハクティビズム

／ウィキリークスの登場／情報源秘匿、リークと倫理／ウィキリークスの活動／既存メディアとの提携／ウィキリークスの現在／リークサイトの勃興／ウィキリークスとハクティビズム／ハクティビズムの三分類

## 第四章 仮面の集団アノニマス

139

アノニマスとハクティビズム／アノニマスとガイ・フォークスの仮面／DDOS攻撃という手法／チャットによる作戦会議／仮面による大義の集約／ゲーミフィケーション／スラックティビズム／大衆動員とハクティビズム／非ハッカーの参加——繋がり  
の社会性／スマートモブズ／クラウド化する社会運動／オキュパイ・ウォールストリート／日本とアノニマス／アノニマスが渋谷で掃除!?／ハクティビズムの新しいかたち

## 第五章 ハクティビズムはどこに向かうのか

173

DDoS攻撃の破壊力／違法行為への偏向？／アノニマスとポリティカルクラッキング／市民的不服従とは何か／市民的不服従の理論とその問題／電子市民的不服従／アノニマスと市民的不服従／時代精神としてのアノニマス／アノニマスは市民的不服従として成立するか

## 終章

200

サイバー戦争／サイバーテロリズム／サイバー犯罪市場は麻薬市場を上回る／ハクティビズムはどこへ行く

## あとがき

209

## 主要参考文献

215

ハクテイビズムとは何か  
ツーカーと社会運動



塚越健司

ソフトバンク新書 204



## 序章

### ハッカー集団が日本を攻撃？

二〇一二年六月二六日、突如として日本政府系のホームページや自民党、民主党のホームページがつながりづらくなったり、サイトが改ざんされるといった事件が生じた。

事件の張本人である国際的抗議集団の「アノニマス」は、前日の二五日にウェブ上で政府と日本レコード協会へ宣戦布告をしていた。それによれば、六月二〇日に議会で可決された、いわゆる「違法ダウンロードの刑事罰化」が著作権法改正に盛りこまれたことへの抗議であるとアノニマスは主張する。

実際に二六日、財務省管轄の「国有財産情報公開システム」が改ざんされた。次に「裁判所」のサイトがDDoS攻撃（Distributed Denial of Service attack、分散型サービス拒否攻撃）という、特定のサーバに多数のコンピュータが一斉にアクセスすることで、サーバを処理不能にさせるサイバー攻撃を受け、しばらくの間接続しづらくなった。その後も国土交通省管轄の「霞ヶ浦河川事務所」のホームページが改ざんされ、日本時間深夜に

至り、自民党、民主党の両サイトがつながりづらくなった。

攻撃は翌日の二七日も続き、「一般社団法人日本音楽著作権協会（JASRAC）」、および「一般社団法人日本経済団体連合会（経団連）」のサイトがDDoS攻撃の被害を受けた。

事件を引き起こしたアノニマスは、しばしばメディアにおいてハッカー集団と呼ばれているが、それは正確な表現ではない。その理由については追って触れていくが、まずはハッカーとはどのような存在なのかを考えたい。

ハッカーという言葉をも有名にしたきっかけの一つに、アメリカで一九八三年に公開された映画『ウォー・ゲーム』がある。物語は、コンピュータ操作に明け暮れていた高校生のデビッドが、ふとしたきっかけで北アメリカ航空宇宙防衛司令部（NORAD）の核システムを管理する、ジョシユアという人工知能を有したコンピュータに接続する。そこで起動したアメリカとソ連の戦略的核戦争シミュレーションゲームを本物と思い込んでしまったジョシユアを食い止めるために、主人公のデビッドが活躍するといった内容だ。

映画にはコンピュータによる人類滅亡というコンピュータの無限の可能性と脅威が同時に描かれているばかりでなく、ティーンエイジャーによるコンピュータ犯罪など、現在の

情報社会を取り巻く様々な問題がちりばめられており、これによってハッカーという言葉にマイナスイメージが付与されてしまいうきつけの一つとなった。

## ハッカーと創造性

ハックとはハッカーの語源にもなった言葉であり、ハッカーに特徴的な行為を指す。それはハッカーの創意工夫によって生まれる創造的行為であり、大規模なプロジェクトというよりは限られたリソースの中でこしらえるものであり、それでいて誰もが驚くようなスマートで合理的なプログラミング行為であった。ハックに夢中になった者たちは、しばしば法の壁を通り越し気の向くままにハックに没頭する。その情熱が故の行為が、時に犯罪者とのレッテルを貼られることになり、また実際に犯罪者へと堕ちていく者もいる。

しかし、ハッカーには「ハッカー倫理」と呼ばれる暗黙のルールがある。それは徹底した情報の自由と情報の共有という信念であり、非合理的な官僚主義と権威主義に対する反発にある。ハッカーは自らの実力で事を成す社会に生きているが、その過程においては情報を広く共有することで、より合理的で創造的な実践を可能にする。ハッカーはツールを製作すること、しかもそれが他人のしないような斬新なものであることを好むのである。

## ハッカーと政治

コンピュータに夢中だったハッカーたちは、一九六〇年代の西海岸を発端とする反戦運動、ヒッピー文化の影響、あるいは八〇〜九〇年代にわたる暗号輸出をめぐるアメリカ政府との熾烈な争いの中で、次第に政治性を帯びるようになる。

ハッカーは政治的な反発心から、そして情報の共有や反権威主義といった、ハッカーに特有のハッカー倫理故に政治的な活動に乗り出すことになる。そこで用いられたのがハックという手段であり、ツールの製作とその使用によって、社会の変革を促すことになる。ハックによる社会の変革、つまり社会的ハックが如何にして行われるのか、それこそ本書がテーマとするハクティビズムの問題である。

ハッカーが守ろうとした価値、それは「自律に基づく自由」の精神である。一九九六年に発表された「サイバースペース独立宣言」というハッカーの立場からの宣言において、ハッカーはサイバースペースに対する既存の諸国家による介入を拒否する。ハッカーは己の実力と自律、自治によるコミュニティの構築を目指した。

しかし、ハッカーだけのためにサイバースペースがあるわけではない。インターネットの普及に伴いサイバースペースに人々が溢れるようになると、国家の介入を拒んできたハ

ツッカーは、逆に現実の社会に介入し、現実の政治制度の更新を試み始める。

## 注目を集めるハクティビズム

「ハクティビズム (hacktivism)」とは、ハッカーたちの「ハック (hack)」と積極行動主義ないし政治的行動主義を意味する「アクティビズム (activism)」を掛け合わせた造語であり、言葉そのものは一九九五年頃から使われはじめた（セキュリティ対策企業のマカフィーによるレポート「ハクティビズム——政治的発言の新たな媒体となったサイバー空間」を参照。[http://www.mcafee.com/japan/security/rp\\_hactivism.asp](http://www.mcafee.com/japan/security/rp_hactivism.asp)）。ハッカーは自らの技術を用いて政治的にインパクトのある活動を繰り広げる。代表的な組織にリークサイト「ウィキリークス」や、ハッカー集団と誤解されて呼ばれることも多い、国際的抗議集団の「アノニマス」がある。彼らが冒頭の事件を引き起こした張本人である。

ハクティビズムの影響下にある活動は多様だが、ツールを用いた政策無効化と呼ばれる手段によって、既存の国家政策、法、裁判決定を無効化し、政治制度の変革を促す。それは時にデモや集会といった政治活動を凌駕する勢いを持ち、国家の政策や法に影響を与える。ハクティビズムはその効果の面において、大きなインパクトをもった政治活動であ

る。

ハクティビズムとはつまり、自らが作りあげたツールを用いて社会に影響を与えること、つまり社会をハックするという、ハッカーたちの社会運動なのである。しかし、前述の映画にもあるように、コンピュータ技術はその使い方を一歩でも間違えると、社会に多大なる被害をもたらすこともある。すると、ハックが社会にとって有用であるか害であるかという対立が浮上する。

ハクティビズム研究者のアレクサンドラ・サミュエルは、ハクティビズムをその内容から三つに分類する。

- ① ポリティカルコーディング (political coding)
- ② ポリティカルクラッキング (political cracking)
- ③ パフォーマティブハクティビズム (performative hacktivism)

八〇年代から続く伝統的なハクティビズムは①に該当する。ポリティカルコーディングとはすなわち、魅力的なツールを製作・使用することで、実際の社会に影響を与えることにある。

それは近年ではリークサイト、ウィキリークスに該当する。リーク情報提供者の身元を

秘匿するツールを開発したウィキリークスは、社会に「潜在的暴露可能性」を生じさせた。社会の不正に一定の抑止力を与えたという意味において社会をハックしたウィキリークスは、ハクティビズム、とりわけポリティカルコーディングとして機能する。

ひとつ飛んで③のパフォーマティブハクティビズムには、一九九八年に「フラッドネット」というツールを用いて、メキシコ大統領のホームページへウェブ上の座り込み（象徴的行為としてのDDoS攻撃）を実行した電子妨害劇場（Electronic Disturbance Theater、通称EDT）が挙げられる。彼らは政治的パフォーマンスの一環としてハックを利用する。

これらに加えて、ハクティビズムにおいて問題となるのは②のポリティカルクラッキングである。ポリティカルクラッキングには冒頭の日本政府に対するサイバー攻撃同様、多くの国々で違法とされるDDoS攻撃や、データの強奪と公開といった過激な行為が含まれる。そして、このポリティカルクラッキングの要素と③の要素を同時に含んだハクティビスト集団こそ、冒頭で指摘したアノニマスである。

結論からいえば、ハックが有益であるか害であるかの判断は、ハックの方法や結果から評価を下すほかはなく、またその評価者の立場によっても異なるだろう。だがサミュエル

の分類から、ハクティビズムは方法論においても対立が見いだせる。それは、正統派ハクティビズムのツールの製作・使用によって間接的に社会をハックする方法と、ツールではなくネット上や現実の世界において、直接的に対象に抗議することで社会をハックする方法である。後者はその創意工夫の精神によって、ユニークな抗議の方法論を確立することで現実をハックする。

## アノニマスと直接的ハック

ツールの利用によって間接的に社会の変革を促すポリティカルコーディングが正統派ハクティビズムであるとすれば、アノニマスはハクティビズムの中でもかなり異色な存在である。

アノニマスはツールの製作という意味でハックを用いることはない。彼らは既存のツールを用いてDDoS攻撃を仕掛けることもあれば、中には対象企業や政府のサイトに不正侵入を試み、情報を不正取得し公開することもある。そうかと思えば合法的なデモというアクティビズムⅡ伝統的な抗議活動を行うこともある。

様々な要素が複雑に絡みあったアノニマスⅡ匿名の集合体は、サミュエルの分類にも正